

「きのふはけふの物語」の

「笑い」の発想について

—「中世謎」「俳諧連歌」との比較—

音

誠

一

はじめに

我が国において言語遊戲の系譜と思われるものは古い。古事記の地名伝説は一種のこじつけであり、万葉集の戯咲歌なども一種の言語遊戲とみることができる。更に土佐日記や枕草子、古今和歌集の歌などにもうかがわれ、修辭的技法の一つとして、日本文学の中へ滲透していった。

その言語遊戲の一つに謎がある。謎はその解き方にいろいろ技法があり、変化に富む。特に中世謎は問と答から成立している二段謎である。謎をかけて解く過程、つまり問から答へいく過程において比較的近いものに、同じ言語遊戲の系譜をもつ俳諧連歌がある。この謎と俳諧連歌とは以前その発想について比較してみた。この両者に共通するものとしてその底流に「笑い」がある。この点について性質も成立時代も近いものとして、すぐれた笑話、純粹な笑話が多いといわれる「きのふはけふの物語」がある。これに収録されている笑話の数は相当数あり、発想上かなり似かよったものがある。その発想は、かなり多岐にわたり、当時の言語生活の一端を示すものと

考えられる。

そこできのふはけふの物語の笑話性、可笑味を分類、分析し、その発想の一端をのぞいてみたいと思う。さらに前記の謎、俳諧連歌と「きのふはけふの物語」と比較してみたい。テキストとしては比較的身近にあり、手に入りやすいものとして、寛永版（古典文庫）金地院本（古典文庫）、江戸笑話集（日本古典文学大系）を選び、この三本の中で収録数が多い日本古典文学大系本を採用した。笑話性、可笑味の分類、発想については、その笑話全文を紹介するのが理想なのであるが、紙数の関係で、番号もしくはあらすじを紹介するのにとどめる。ただし比較的短いものは全文をあげる。

笑いの要素というものは、複雑多岐で、厳密に規定することは不可能である。しかし、ただ何でもむやみに笑うのではなく、その対象があつて笑いが生ずるのである。その笑いにしても、実際には、顔面、笑い声、身ぶりなどに表われるわけであるが、単に緊張をとくきぐす微笑から、呵々咲笑するものまで種々様々である。笑いに

はある程度個人差はあつても、その対象——笑いの発生源にはそれほど差はないと思われる。そこでどのような対象からどのようにして笑いが生じたのであろうかというのをいくらか考察してみた。

その対象であるが、比較的純度の高い笑話が集められ、歴史的にも江戸期のおびただしい笑話本の祖ともいえる「きのふはけふの物語」をもとにして、読者はどのように笑いを感ぜたとつたのか、登場人物、行為、ことばの洒落などといったものから、笑いの発想、焦点といったものを少し考えてみたい。謎や俳諧連歌、狂言なども笑いの要素を多分に含むが、笑いそのものではない、いわば付随した笑いの、傍系の笑いといえよう。その点では笑いそのものを表面に出し、笑話として集められた「きのふはけふの物語」には、飾りけのない赤裸々な当時の言語生活の一端を知ることができよう。

きのふはけふの物語と謎、俳諧連歌との比較

まず「きのふはけふの物語」と謎との共通点であるが、意外性という面では大部分の笑話も意外性が笑いの大きな要素の一つになっている。この点では謎も意外性の追求が多くをしめ一致する。すなわち出来のよい謎というのは意外性があればあるほどよいとされる。意外性が笑いを呼ぶわけである。謎と笑話との笑いの性質は大いに異なるけれども、謎には笑いはいないといきれない。謎が解けたときには明らかに可笑味が存在するのである。しかし笑いの質にいたつては低く、笑話のように変化に富んだ笑いというのは生れてこない。

相違点では形の上で謎は短く、笑話は長いということである。つまり謎は口調がよく、歯切れがよく、リズム感といったものが多分に含まれる。全体に単純で、思想的なものとか、話の筋のおもしろみなどは盛ることができない。謎における「問」はいらないもので

飾りたてれば冗長になり、単刀直入にずばり相手に問いかけるといふことがなくなりおもしろくなくなる。一方笑話には一般的には謎よりも長いということがいえるが字数や型もきまらず、長短様々である。短くても、話の筋があり、人物、行為は相当詳しく描かれている。当然笑いの質も複雑になってくる。こういった笑話の中には、笑いの焦点といえるものがあり、後世、仕方咄、落語へと変転していき、今日につながっているわけである。

次に俳諧連歌と笑話との共通点では、その文字の示す通り、機知滑稽が含まれ、謎と同様に底辺には笑いが大きく存在する。笑いは笑話そのものには及ばないが、俳諧連歌は少なくとも、謎より複雑な笑いをかもしだしている。長さという点でも前句付句の間に連続した笑いが生れている。その笑いの質の面では、謎と同じく、いふなれば短詩型であり、それほど高級な笑いとはいえないかも知れない。しかし発想的には変化に富みよほど笑話に近づいているといえる。とらわれている内容にしても笑話に非常に近い。すなわち当時の世相の一端を如実に示しているといえる。登場人物にしても、僧侶、若衆、尼、山伏、陰陽師、守護、公卿、武家などがあらわれ、きのふはけふの物語と一致する。また神仏の面においても非常に身近なもの、むしろ茶化しているようである。また前句付句における言語遊戯的な面は笑話の中にも数多く利用され、可笑味を出している。特に同音語利用の洒落の面に著しい。

一方相違面では俳諧連歌はいわば短詩型であり、字数もきまつていて話を運ぶというわけにはいかず、笑いの質も限定されてくるといえる。この点では謎も同じである。

Ⅰ 言語遊戯を主としたもの

1 歌の入ったもの

きのふはけふの物語の中に歌の入ったものは比較的多く三十首余りを数える。多くは歌を話のまとめとしている。言語技巧をこらした狂歌、落首の類が多い。多くは同音系統の語句を読みこんで、その話の結びとしたものである。その代表的と思われる型をいくつかあげてみる。

A 古歌をもじったもの

下1 見たせばやなぎさくらにござかけて都は春のにしきなりけり

下44 あまの酒ふりさけみればますかあるみかさも飲まばやがてつきなむ

いづれも有名な歌をもじったものである。もじることにより滑稽をねらったもので、こういった傾向は謎や俳諧連歌においてもかなりの数にのぼる。特に俳諧連歌に多い。有名な古歌をふまえて前句付句にわたりあい、卑俗化し、茶化している。

犬202 三笠の山を立つる誓文

天の原ふるさけのめと責められて

犬63 小町も尼になりて語らへ

花の色はうつりにけりな梅ほうし

などがあり、名歌も台なしである。また二人で読みあつて前の歌をもじったものもある。

下41 君をのみ恋ひこがれつる手すさみにかどてに出て根芹をぞ摘む

この歌をもじつて

我しらみ鮒あぶり驚足もじりせどの晶で牛蒡ひきぬく

B 同音を読みこみ洒落としたもの

話の中のおかしさを歌によつてまとめたもの。いわゆる話のオチとも受けとれる。

上13 不断光院とて近衛殿の太閤ねんごろの長老あり。そうじて長老分はあしうちにて参りけれ共、比長老連歌ずきにて、せつせつく御会にまかりいでらるゝ故、其日ばかり公卿を御免と仰せ出さるゝ。長老御言葉にあまへ、「常住下され候やうに」と御のぞみあれば、太閤御笑ひなされ、とりあえず

くぎやうをば時々なりとすはれかし不断くわうはいはれざりけり

長老格としては足打折敷（料理の品数が少ない）なのに、いつも公卿衝重（こちらの方が足打より料理の格が上で品数も多い）をいただきたいというのである。それを太閤は歌でもつてはぐらかすわけである。一首の歌の中に同音語をおりこみ（不断食わう——不断光院）笑いのうちに要望を退けるというのである。

このように話のおかしさおもしろさを文末で歌にまとめたものに上18、上59、上拾21、下14、下43などがある。いずれも同音異義語を歌の中におこりみ滑稽化をはかっている。中には卑猥な「隠語松茸」（陰茎）上拾21、「四字」（しじ、小児の陰茎）下43などの話もある。

謎においては同音異義語で置きかえるというのは常套手段である。

C 特定の語句が前後に響きあっているもの

上14 むかし、近衛殿を何のしさいやらん、秀吉公の御時薩摩の坊津へ御ながしなさるゝ。配所は鹿児島へうつらせ給ふ。そのとき

大臣の車にはあらであはれにも乗するかごしまになふばうの津乗するかごしま、になふばうの津と地名の一部にかけ、前後に響き

あっている。こういった例は俳諧連歌にも多い。

菟 1909 庵の夕ぞ谷ひとつなる

松あれば風ふくろふの声ききて

D 世上の事件をもとにしたもの

これもBと同じように同音語利用のものであるが、狂歌、落首の類で世上の事件などが歌の中によりこまれ、諷刺化され、笑いの要素となる。

下2 関東の事なるに、今井殿といふ人の娘を、春日殿へ嫁にとられしが、やがてあくる日に送り帰されし。いかなる事にや、おぼつかなし。此時市川肥前の守、

末とげてとてもいまいの娘御に一夜の宿もかすがどんなり

今井——居まい。借すが——春日、鈍——殿などの同音をおりこみ皮肉っている。その他同様のものとして、上拾50（三首）、上拾53上拾54、上拾55などがある。謎や俳諧連歌には狂歌や落首に近いものは少ないようである。

E 話の中に二人で歌を読みあっているもの

話の中に歌をかけあうものがあり、この返歌を解答とみると謎に似かよった面もある。

上16 定家の卿の弟きやうがく坊、事の外不辨、其年のくれに定家の卿へ読みつかはれる。

きやうがくが師走のはてのからいんじ年うちこさん石ひとつたべ

返し

定家が力のほどを見せんとて石を二つにわけてこそやれ

此返歌に、米一俵そへて、つかはれけるとぞ。

この話は石合戦の石と、米一石をかけ、返歌は石を割る意と一石の半分五斗をかけている。

F 女房詞の読みこまれたもの

上30 薄墨に作りしまゆのそばかほをよくく見れば帝なりけりこの歌の中には薄墨（蕎麦がきの女房詞）、帝（三角、蕎麦の女詞）などがありこまれている。

G 同音語が特に読みこまれていないもの

歌の中には同音語が読みこまれていないものもある。上37、拾上22、上拾51、上拾56、下16などである。

H 沓冠歌

上拾77「小がたなたしかにをく」という語を一首の歌によりこみ沓冠歌としたもの

こゝにきしかゝるおもひかたびの身になさけある身をたのみてぞゆく

2 連歌の入ったもの

連歌を材料にしたものはいくらかある。当時、連歌は材料としては適切であったと思われる。発想としては、他からの盗作、連歌の禁忌事項を破ること、或いは連歌専門用語を多発して口調をまねたりして滑稽化をはかっている。

上15は謡曲「晏女」の中の文句をそのままとってつけたいわば盗作である。上拾27はわたし（転宅）の連歌をよんだ際、火事に關する忌みことばを知らないでつけるというのがある。上拾37は連歌があまりにも下手なので、宗匠は錠をさいてをかせられいといった話。その他上拾38、上拾41、上拾74、上拾75、などがある。

3 言語遊戲的な面が濃いもの

A 片言、撥音など

上拾10では地震がいった明くる日「かたこといひ」が門跡様へ御見舞にきて「大づすん」(大地震)「大なゆ」(なぬ、地震)といったかたことを使ったので、門跡様は、その口調をまねて「なゆやらづすんやら、世がねつする(滅する)かと思ふた」といい、片言が題材となっている。

撥音を材料にしたものもある。上38ではちごや法師が寄りあって、田楽を食べるとき「何にても三つはねたる事をいふて賞翫せう」といって撥音が三回ある語をいって田楽を食べるのがある。下24ではある人がちごに「法印さまは御留守か」と聞いたなら、「いや持仏堂にかきして御座る」「かきとは何事ぞ」「ひだるさに、看とも経ともはねられてこそ」看経かんきんというべきところ、空腹で、はねられない(撥音)というのである。

謎にも俳諧連歌にも撥音を利用したものがあつた。

天 かたはねの天狗やみにいる

答 かんたんの枕

犬13 霞より一はねはぬる月もりて
らんという字にかやる雁が音

B 字尽し

同じものをくり返すことが笑いを生むと見えて、「きん」の字尽し、「つ」の字尽しといったものがある。

上拾31 時宗の僧が禅宗の僧に、「禅宗の僧はようきんの字を使はるゝ」といって「両きん山寺、金藏主、茶巾、布巾、浄巾、頭巾」をあげれば、禅宗の僧は、時宗の僧はよくつの字を使うといふて

「南無阿弥陀仏、踊つ、はねつ、鉦を叩いつ、何やらしつ」をあげて応酬する。

こういう同類のものをあげることは謎にも同じような発想がある。内容的には違ふが同音のものを多くあげることは同じといえる。奈 しほくとしほくくとしほくくとしほくくとしほたまはる夕顔

答 八塩のひさご

C 無理問答式

上34 「上野、下野有て、中野なかつのなきはいかに」という問に対して「筑前、筑後あつて筑中なきがごとし」と答えるのである。下27では「一つから九つ迄、つの字ありて、十につの字のそはぬは如何」という問に対して「五つづにつの字を過剰にした程にぞ」と答える。無理問答は言語遊戲の一つとして後世よくできた。俳諧連歌の中にもよく似たのがある。

菟1946 手洗たらひにて足をばいかで洗ふべき
水瓶の湯はわかぬものかは

D 算数式

下27では叡山の法師がちごに、「ここに御昼がありますから九つをうつたらば召しあがりなさい」といっておいだのに四つにもう食べてしまった。その理由として、「今朝五つと今四つとで九つではないか」というわけである。五つと四つと寄算して九つと答えたわけである。こういう算数式の発想は謎にも俳諧連歌にも多い。

奈 十三になれどもひたるい

答 くしかき

犬34 尻をかゝへて走りこそすれ

年寄の五里ある道を一里来て

E 謎的性格をもつもの

笑話自体の中に謎的な内容をもつものがある。上39では田楽を秀

句をいつて賞味するという趣興で

清盛の長刀

なんぞ

いつくしま(敵島、五串)

神のつぶり

なぞく

三くし(御髪、三串)

医者の本尊

なぞく

八くし(薬師、八串)

といったのがある。

F 故事、諺、成語をきかせたもの

下46糸柳を無断で堀りつつていくので、とがめると「柳は縁(見取り)ぢや」というので相手の鼻柱をなぐりつけて血をたらし、「鼻(花)は紅よ」と応酬する。成語を利かせた機知のやりとりは、簡潔で口調もよく、笑いを呼ぶ。他には下48、下拾6にもある。謎や俳諧連歌についてもこういった例は多い。

4 同音によるもの

A 思みことば

思みことばを無意識のうちに使うことによって、笑いが生ずるもので一種の無知のおかしさともいえる。

上41ではもの思みする人が下人をよびよせ、あすは元日だからと若水をむかえるときのまじないの文句を教えこむが、元日になり忘れたので、腹を立て枕を投げつける。その時下人は「人の物思ふ所へなげきをさせらるゝ」といった。この下人のことばの中には「物思ふ」(愁いに沈むという不吉な意を含む)「なげき」(投木、木製の枕のほかに嘆きの意があり、不吉)といったことから、せっかく物思みしているのにそれを知らないで下人が破るといったのは滑稽である。そのほか上拾33、下56も同発想といえる。禁じられたことを破るというのは一種の緊張を緩和する働きをもつということがいえる。

謎、俳諧連歌は笑話と違い、こういった話の筋、前置きをつけるというわけにはいかない。

B 語句の切り方によって起る誤解

上36に下京に目くすし(眼科医)がいた。のれんに「金こ目くすりや」としてあった。人々は、かね(金)、こめ(米)、くすりの三種があるといつて買いにきた。それで大変迷惑したというのである。他に上60、拾上67の二例がある。いずれも大げさで作り話しめいている。謎や俳諧連歌にはこのようなものはないが、謎では条件により問の語句を区切り、解へ導く例は多い。

C 性的ニュアンスを含むもの

会話の中に無意識に性的なことばが同音として含まれるものである。「思みことば」と同じく、当人が意識せずにしゃべっているものである。下52ある浄宗土の高僧が、上臈衆にする説教の長短をたずねた。「上臈衆は長ひがすきか、短ひがよひか」。上臈衆は説教の長短を性の意味にとり笑い興するのである。上拾36、下36、下33も同様な発想である。これらは普通の会話なのであるが、本人は意識せずに艶笑味が生ずる。謎や俳諧連歌においても艶笑味をねらったものはかなりある。

D 特定の語句が理解できないため伝達不能になる場合

当時都会、田舎の対立概念がかなりあったとみて田舎者を笑いの対象として描いているものが多い。別に軽蔑したり侮蔑したりするわけではないが田舎人の無知無教養を格好の笑いの対象としている。

上拾2では嵯峨の大覚寺殿へ、遠国の順礼が参り、「これは何と申す所ぞ」という。「これは御門跡」と答えると三文にまけて見物はなるまいか。これは田舎者故、御門跡を知らず、五文の関所と勘違

いしたのである。そのほか手水粉（上23）、螺（上拾3）、饅頭（下39）切麦（下61）など田舎者故かんじんの語を知らずトンチンカンなことになる。正確には同音語とはいいかねるが、無知な田舎人を笑う材料としたのであろう。

II 内容から笑いの生ずるもの

1 意外性によるもの

A 若衆が登場するもの

これは広い意味でいえば、若衆（ちこ）の食い気、物欲、下品さその他若衆にふさわしくない行動はすべて意外性をもつということになる。若衆という身分・階級における既成概念の破壊である。そこに可笑味が生ずる。既成の社会規範からはずれるということが緊張をゆるめ、笑いが生じたわけである。

若衆、ちこの食欲のすさまじさが主題となっているものが多い。彼らは常時、腹をすかせていたと思われ、異常なまでの食欲が笑いの種となっている。彼らは平常おとなしくてつましやかで控えめなものと思われていたのが、食欲に執着すること、その意外性を可笑味の対象としたのであろう。

その極端な例として、上63ではそこつなる若衆が餅をのどにつまらせて苦しむ。そこでもまじない師を呼びのどから吐き出させる。その時、若衆は「あつたら物を内へ入るやうにしてこそ上手なれ」という話や、下25はあるちこが餅の食いすぎで発熱し苦しむ、その時「薬を参らせう」というが、ちこは薬や湯が口へ入るならばもう一つ餅を食いたいといい、死ぬような苦しみの中でも、食欲を忘れな

いのである。その他上31、上62、上拾11、上拾70、下26、下27など同発想といえる。

そのほか若衆の欲深な行動を笑ったものもある。（下51、下65）また下品さも笑いの対象になっている。（上10、上58、下10）

謎や俳諧連歌ではどうか、謎はその性質上、若衆が欲深だというようなことをいいかえるようなことはない。若衆、ちこが出てくるのはいくらもある。

古 この下に若衆あり

答 あちこ

俳諧連歌において、よく似た傾向をもつものもある。謎と違ってやりとりがある関係上、意外性がより強いと思われる。

犬171 しはばかりにて受くる一ぱい

さし向ふ若衆のみ目は悪けれど

B 僧侶が登場するもの

僧がその戒律を破ることが主題としてよくとられている。僧には厳しい戒律が課せられていたが、同じ人間でもあり、欲望も人並みであったといえる。尊敬すべき僧を、われわれ同じ人間、同じ次元に引きもどしたとき、滑稽を感じるのである。そこには意外性——いつてみれば緊張の弛緩が存するのである。具体的には僧侶の肉食、妻帯ということになる。僧の肉食の現場を押えられ、その僧がつじつまの合わないトンチンカンな答、あるいは動作をするものが多い。

上拾34では鯉料理の最中、檀那に見られ、「此鯉は何と申鯉で御座ある」（金地院本では「此こいなんといふうをて御さある」となっている）といったり、もっとひどくなると肉食に妻帯が加わってくる。上44では鮑の腸和料理の最中、檀那に見られ弁解するさい口がすべり「子もちにくわせよ」といったり、上22は衣の裾に乾鮭が

ついているのを弁解し「是は女共が棄つかひにする」といい、肉食どころか妻帯まで露見してしまうのがある。そのほか僧、比丘尼の色欲が猥褻な姿ででてきている。

謎、俳諧連歌と比較してみると

奈 長老の二たび寺を出給ふ

答 ついがさね

これは肉食妻帯を笑ったものかどうかははっきりしない。謎の技巧としてはこれ以上長くするわけにはいかないのである。

俳諧連歌では肉食妻帯はそれほどはっきりでてこないが、仏教そのものを尊敬すべきものと見ずに輕妙さをねらい、茶化したり卑俗化したりして身近なものに置いている。

犬刈 坊の山椒の芽にぞつませそ

いとどだにぬたしやうたうと聞く物を

C 思惑違い

思惑違い、予想外のことなどを笑いの発想の型とした話が多い。中でも性をからませたはぐらかしが多く、読者をひきつけておいてパツと離すといった手のこんだものがある。

上61では山寺の沙弥がちご様へ御無心、ちごはてつきり男色のことと思ひこむが実は食欲の方で、眠藏にある味噌が欲しいという話や、下23は亭主の留守に内儀に申したきことがござると開きなおられ、てつきり口説かれると思ひしかたなく返事をするが、実は「朝夕の御飯が食いたらぬ。ちとおしつけて下されよ」という。色恋の方ではなくて食欲の方であったというオチである。他に上57、上66、下拾10などは同発想といえる。

意外性によって質を高めるといえるのは、謎や俳諧連歌では常套手段であり大きな要素となっている。謎ではいろいろな技法で解へ導く。その発想が意表をついたものであればあるほど、価値がありお

もしろいといえるのである。この点では俳諧連歌も同様であるといえよう。

2 愚かさが主題となっているもの

A 愚か者、愚痴蒙昧の類

ほんとうの愚か者で、その会話、動作などから笑いの生ずるもの。後世落語のオチなどにも使われている。

上12では田舎の主人と下人が京へ上り三条に宿をとり、東山に見物に行く。その時宿の目印として下人は門柱にツブで書きつけをしておいたり、屋根に鳶のとまっているのを目印にしておいたりした話。上拾8、下31なども同発想であり、愚かではあるがどこことなく憎めず暖かみすら感ずる。しかしこれも徹底すれば悲劇となり、可笑味も薄くなってしまう。下62ではある者が美しい女房を持ち自慢するのを、目の細きが難といわれ、女房の目尻を剃刀で切り広げることが失敗し、ついには盲にしてしまったという話は凄惨ささえ感ずるようである。

B 文盲の類

無筆文盲のしつたかぶりを笑いの対象としたもので、全然字が読めないのに知っているふうをして馬脚を表わすもの上77、上拾51があり、手紙をさかさまに見て、このごろは手紙のはじめのところに判をすることが流行している下拾19といたり、勅筆の意味を知らなかったり下4、その他上拾5、上拾45などがある。

C 伝達不能の場合

話し手、聞き手の間に意志が通ぜずトンチンカンな状態になる場合がある。特にそれは当時の社会制度、生活程度による違いにより、ある特定の語が理解できず、その受け答えによるって起るトン

チンカンに笑いをおいたものである。当時は田舎、都の対立が相当顯著であつたとみえて、田舎者、山家育ちが笑われる場合が多い。

上拾3では信濃の国の田舎者が生鰯を買いに行き、実物を知らずだまされて、螺をつかまされて帰る。その螺をいろいろな人物が、螺に勝手に名をつけ、知ったかぶりをする。まどひき、おにのきこぶし、へふぐり、にかわときなどいいあう話、他に上23、上拾40、下28、下61などがある。

なおそのほかに、これは無知ではないが寺院と俗界との隠語めいた語をいい、僧俗相互の間に意味伝達の断絶がおこりそこに可笑味が生ずるものがある。これも一種のトンチンカンをねらつたものといふことができよう。下9ではちごが里帰りをしたさい、文を落しそれを親に見られる。その中に「おにやけ」(男色)という言葉がでてくる。おにやけの意味を聞かれたので、ちごは困り、お酒のことだと嘘をいう。そこで僧俗の間で話がややこしくなり笑いが生れる話や、上拾39は同じく寺院隠語の「すばり」(男色、小穴)を下戸の意としてごまかし話が通じなくなってしまう。またこれは寺院ではないが「せんずり」(手淫)を「人の不弁したる事」と教えとんでもない失敗をする話などがある。

D 話の内容が大きなもの

これはいわゆるホラ話の類で笑話の型としては一般的であるが、本書ではこの型の話は少ないようである。

上48では東西のホラ比べで東では木賊でつくった草鞋をはいたので、足の裏がみがかれ足首だけになった。西では天目茶碗を鼠がかじり、あまり堅いので鼠の歯はちびて尾だけになってしまったという話がある。上42でも同様でまことしやかに大嘘をつくという話である。

3 性をける可笑味の強いもの

性をからませた笑話は実に多い。平常触れてはならないものに触れ、タブーとされているのを犯すことによって笑いが生ずるのである。しかし余りにも露骨に表現するとそれは暴露ということになり、猥褻となり笑話としての生命を奪うことにもなりかねない。

A 子どもが関係しているもの

子どもの方が役者が一枚うわてで親のことをよく知っていて親を当惑させるものがある。上拾18、下63などがそうである。性的な語句を子どもが知らずに使用している場合とか、子どものこまつしゃくれなどが笑いを呼ぶもの。上拾19、下拾1、下拾9などがある。

B 臭氣をあつかつたもの

下42に「女の前の臭き物が香の物を漬けたるは臭うて食われぬ」、上拾4「頬さきの赤きものはかならずへゝが臭い」というのがあり、これは俗信と思われる。他に上拾8、下拾2下拾11などがある。

C 男色がおこりこまれたもの

若衆、ちごが対象になっているもので、内容的にはあまりすぐれたものがなくおもしろくないようである。上51、上拾68、上拾72、上拾73、下12などがある。

D 愚か者と性をからませたもの

性をからませた愚か者の話は多い。愚か者の気のまわしうの話として上拾14がある。下59では女房が間男を引っぱりこんでいる現場を見るうつけ男の話で、自分の立場を忘れ、女房と間男との話の中に自分の意見を出すという客観的表現の可笑味をねらつたものがある。

E 病氣と房事

病氣であり、医者からかく房事を止められているのにどうして

も止められないでいる男の話などがある。下拾20、上拾22、上55などがある。これは人間の本能とはいえ、何か笑いを通りこして悲哀が感じられるようである。

F 比丘尼の好色

比丘尼が登場する笑話で比丘尼の好色ぶりが描がれている。性に関したことを知っていて知らないふりをしている。それが何かの拍子にバレて思わず本音を吐くというのが笑いの対象となっている。上拾6、上拾7、上拾58、上拾61などがあげられる。これら比丘尼の登場する話は猥褻なものが多い。

謎や俳諧連歌にも「性の笑い」を加味したものは多い。

4 知恵話、トンチ話の類

この笑話の中には知恵話、トンチ話の類と思われるものがある。

下拾8 ある夫、妻がいやになり離縁、妻が出て行くさう美しく化粧したので、夫は見直して引き止めようと、一計を案じた。男は川のはたまで送り、自分の舟で向う岸まで渡した。そして「舟賃を出せ」といい、「もはや暇を出してからは他人じやほかに、舟賃がすまは去なせまい。戻れ」といい、つれて帰った。

下22 ある夫、女房との離縁話、そこで妻に何なりと欲しいものをとらせようと誓文をたてる。そこで女房は「惜しき物は見よ（是よ）の誤りか）」（金地院本では「われらのほしき物は、これよとて、五六すんなる物を、ひんにきりとつて……」寛永版では「われらのほしきものは、これよとて。おとこの物をひんにぎり、ひたものひねりける」といふ。誓文のてまえもとの翰に納まる。伊勢物語の「筒井筒」と類似性があり人情の機微がしのばれるようである。そのほか上35も同じ発想である。

トンチ、知恵という面からでは謎、俳諧連歌も共通している。な

るほどと思わせる点では同様である。しかし話の筋の整ったトンチ話というわけにはいかない。

5 屁理屈

この笑話の中には屁理屈をこねるものがある。きまりきった屁理屈をしつめらしくいうところに笑いが生ずる。

下49では親が自分の子を養育したことをいってきかせ、子は自分が頼んで生んでもらったわけではないと、出生、養育に対して屁理屈をいう。また下拾4ではある侍が、銭一文と柿の帶とまちがつて拾いあげたが、自己の行為を正当化するために、都合のいいように屁理屈をつける話などがある。

謎などもつきつめていえば同音異義語に置きかえること自体が一種の屁理屈であるともいえる。

6 ものごとの徹底のしすぎ

これは極端な欲深さや吝嗇を描いたものである。

下拾15ではある金持ちが重病になり死の間際になっても薬を飲まない。女房が夫の吝嗇をよく知っていて、伯父が薬代を出してくれただですよという、その重病人が口を開いて薬を飲んだというのである。

この話のように物ごとの徹底も度をすぎると笑いを呼ぶ。よく似た話が上63、下64にもある。こういった話は人間性の一面が表われ、笑いの面も濃いけれども、人間の業といった点が多少ともあり笑ってばかりではすまされないようである。

Ⅲ 笑話性の少ないもの

本書には明確ないわゆるオチ、サゲなどの類があり笑いの要素に

あふれた話も多いが、笑話性が不明と思われるものも相当数ある。

下拾7ではある人が鼓を好み、ここかしこで神事能などがあると出かけ、遊んばかり暮しているうちに親譲りの財産もなくなくなってしまった。そんなわけで人に当り散らし、けんかをしてひどい傷を負ってしまった。そこで鼓を打つこともできず家にいて仕事に励んだところ、再び富み栄えるようになったという話がある。

この話には、通常、常識で考えうる可笑味というものはないようである。強いていえば話の前半の鼓がすきでどこへでも出かけ、遊び歩いていくことの愚かさというところだろうか。この話の末尾に評語らしきものがついていて「たゞ及ばざる事に心をかくるは、我身の敵をもとむるににたり」とある。こういう面からでは明らかに教訓、処世訓的な面が強く笑いの要素は少ないと思われる。

上拾46は、ある人が奉公して日夜緊張のしつづけで、これではたまらないと仮病をつかい、家に帰り自分で食物などを調べてみた。そうすると一日のうち立ったり坐ったりした回数が七十回以上に及んだ。そこで考え直し奉公に精を出し、励んだところ出頭者といわれ七珍万宝がみちみちたという話である。これにも評語があり、「たゞ迷の眼に地獄も餓鬼も敵も見え、悟れる眼には、極楽も寂光の顔もかく見ゆと思ふべし」という比較的理屈っぽいものである。この話の可笑味はというとやはり当り前のこと、常識的なことに念を押したということになるであらう。いくらか愚かしさがつきまとうくらいである。後の評語にしても仏教的な語句を使用し教訓性が強い。

下拾14 ある男が常に大黒天を信じ、守り本尊と尊んでいたけれども身上おとろえて旅に出る。ある村で貴賤をえらばず婢にとるといふ高札を見て宿所に尋ねて行く。美しき娘と盃をとりかわし寝る。

その男はこれまで全てのものにお初穂をささげたので今度もいうので、女陰のもとへ大黒天をささげる。実はそこに蛇がいて、大黒天に蛇がとりついて出てくる。これまでその娘に縁談がまともなかつたのはその蛇のせいだった。そこでその娘といっしょになり、いよいよ大黒天を尊んだという話。

大黒天を信じ、お初穂をささげたので幸運が舞いこんだというわけである。これは大黒天の靈験譚であり、功德譚である。

話はつくり話めいていて笑いの要素は少ない。ただ大黒天にお初穂として女陰をささげるといふ着想は奇抜である。女陰と蛇とは結びつくようであるが、仏とは奇異な感じを与え、純粹な靈験譚とはいえないようである。

そのほかに事実をのべたようなものもある(上拾67、上拾93、上拾64)。上拾57、下拾13などは内容不明であり、理解しがたい。

謎や俳諧連歌にも可笑味の豊かなもの、少ないもの種々様々であり、時代的経過のために不明となったものも多い。

註。拙稿「謎の研究」中世謎の発想について

(石川県高等学校国語研究会誌Ⅳ)

。拙稿「謎の研究」俳諧連歌との比較

(密田良二教授退官記念論集)

金沢大学の同窓の有志がよりあって「きのふはけふの物語」を読みはじめ、ずいぶんみなから教えられた。この報告も研究会のみなさんの助力によってなったことを付記しておきます。